

20

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
アート・コミュニケーション

2023記録集

23



丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
公益財団法人ミモカ美術振興財団

〒763-0022 香川県丸亀市浜町80-1 (JR丸亀駅前)
TEL:0877-24-7755 www.mimoca.org



ご挨拶

2023年度のアート・コミュニケーション事業も無事終了し、昨年に引き続き記録集を発行する運びとなりました。

猪熊弦一郎(1902-1993)の没後30年にあたる2023年は新型コロナウイルス感染症の5類移行により徐々に日常生活に規制がなくなり、さまざまな交流が再開できた一方、経済停滞や少子高齢化社会の進行、孤独などの社会問題の深刻化、国際社会の分断が続いた年ともいえます。この困難な時代に美術館として出来ることは何か改めて考え、原点に立ち戻る——猪熊弦一郎の残した「美術館は心の病院」という言葉を念頭に置き、アート・コミュニケーション事業を推進しました。

多様な人が集まり、新しい価値に出会える場を目指してさまざまなプログラムの提供を試みた1年をこの記録集にまとめました。1年の活動を振り返ると、私たちの活動は美術館と人を繋ぎ、多世代の交流を生み出す可能性があると感じました。これからも地域に根付いた活動を心がけ、より多くの人が文化芸術を享受できる取り組みを考えていきます。

最後になりましたが、各プログラムにご参加いただきました皆様、企画実現に惜しみないご尽力をいただきました作家や講師の皆様、地元企業を始めとする地域の皆様に心から感謝申し上げます。

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

凡例

各プログラムの説明は以下の者が執筆し、文末に大文字のイニシャルで記した。

大浦 美咲(MO)
奥本 末世(MO)
佐伯 美帆(MS)
島田 里都子(SS)
宮本 準子(JM)



「子どもたちの豊かな感性と創造力を伸ばし育む」
という猪熊弦一郎の遺志を受け継ぎ、
年間を通して子どものためのプログラムを実施します

スクールプログラム



丸亀市猪熊弦一郎現代美術館では「子どもたちの豊かな感性と創造力を伸ばし育む」という猪熊弦一郎の遺志を受け継ぎ、子どもたちが芸術に触れ、体験的に学ぶ場として学校団体の来館を積極的に受け入れるスクールプログラムを実施しています。

出会う、はじまる、MIMOCAでの時間

子どもたちに、多彩な表現活動に触れ、“正解”を求めないスタイルで自己の感覚を研ぎ澄ましてもらいたいという考えから、当館では市外からの来館も等しく受け入れています。教育普及担当者は鑑賞において子どもたちが素直に感じ、捉え、言語にして表現できるよう対話を試みます。

館内で過ごした子どもたちは、さまざまな角度から造形や色彩、作品のメッセージ性などを感じとります。主体的・対話的で深い学びは改訂された学習指導要領でも求められており、美術館が持つ知見やノウハウから子どもたちの発達を支援できると考えます。鑑賞対象は、当館コレクションを含む展覧会の作品や屋外彫刻、建築など。鑑賞する作品や鑑賞方法については、来館する子どもたちの学習意欲や発育状況に応じて在り方を変化させます。

来館での過ごし方について、現在のコースをご紹介します。

①作品鑑賞コース

場 所	ゲートプラザ、各展示室、カスケードプラザ
内 容	美術館スタッフと共にオープンスペースや展示室の作品を鑑賞します。鑑賞を通して作品と自己、自己と他者との対話を促すプログラムです。
モデルコース(60分)	オリエンテーション(10分) → 作品鑑賞(40分) → 終わりの挨拶(10分)



②館内見学コース

場 所	ゲートプラザ、各展示室、カスケードプラザ
内 容	ワークシートをもとに美術館スタッフが館内、屋外作品を案内します。作品名を考えてみたり、自分たちの身体で美術館のスケールを測定したりするなど活発的なプログラムです。
モデルコース(60分)	オリエンテーション(10分) → 館内見学(40分) → 終わりの挨拶(10分)



③体験学習コース

場 所	ゲートプラザ、各展示室、造形スタジオ
内 容	常設展を中心に展示室で鑑賞した後、造形スタジオにて猪熊作品を参考に、実際に造形物を作るワークショップを行います。制作した造形物は持ち帰ることができます。
モデルコース(80分)	オリエンテーション(10分) → 館内見学(30分) → ワorkshop(30分) → 終わりの挨拶(10分)



作品や空間を鑑賞する際には、「何が描かれているか」「どんな色や形が見えるか探してみよう」と対象や事象を捉える問いかけと対話を重視します。担当者はさまざまな見方、考え方を率直に表現できるようサポートしますが、子どもたちの感性はこうした意図を易々と飛び越えていきます。猪熊の作品を鑑賞した際、色彩や形だけではなく「元気づけようとした」「こどものように描こうとしたのかな」と作家へ意識が向けられた発言もありました。作品や作家に対する予備知識があったのかもしれませんが、美術館で本物の作品を目にすることが新たな見方や発見に繋がったのだと思います。

教職員の声

- 難しいかな…というこちらの見解とは違い、児童たちの楽しそうな姿がとても印象的でした。
- 普段おとなしい生徒が積極的に活動していた。
- 帰校してからも「楽しかった!」という児童たちの声がたくさんありました。

まとめ

各プログラムはモデルコースを軸に考えていきますが、マニュアルはなく、教職員の方のご希望や、当日の子どもたちの反応を窺いながら進行していきます。そのため、毎回話す内容やルートを組み直したりする必要があります。スクールプログラムの受け入れにも「正解」がありません。教育普及担当者自身が展覧会作品やコレクションの理解を深め、子どもたちが「楽しかった」「また来たい」と思ってもらえる体験を提供したいと考えています。(MO)

研修会

全ての丸亀市の子どもたちに向けたプロジェクト

【背景】

2022年度、長年子どものためのアート教育活動を行ってきたことが評価されて「第44回 サントリー地域文化賞」を受賞しました。当館の子どもに関する事業への丸亀市の期待が高まるなか、この受賞が後押しとなり、更なる学校来館の促進を図ることとなりました。具体的には、人格形成において重要な時期である小学3年生を対象に「よりよく生きるを学ぶ」というテーマのもと総合学習時間での来館を促進していきます。



当館では図工や美術、遠足などの時間を利用して来館されるケースが多いです。来館自体も、担当教員の判断に委ねられています。今まで通り意欲的な担当教員による来館申し込みを受け入れると同時に、丸亀市の子どもが小学生の間に必ず一度は来館できる仕組みを構築することを目指します。

【研修会について】

本年は市内の16校の中から、まずは近隣6校をモデル校に選出。徒歩での来館が難しい学校にはチャーターバスの使用料金を当館が負担しますが、バスの手配は学校主体で行います。また1学級100人越えの学校では最低でもバス2台は必要となり、いかに費用を抑えながら来館できるか美術館と学校とで知恵を出し合う必要があると説明しました。

まとめ

バス利用も含め、この仕組みを市内全体に浸透させるには、学校現場との丁寧な話し合いが重要です。研修会や説明会の実施を通して、対話を重ねていきます。(MO)

本年度モデル校

	クラス数	児童数	交通手段
城乾小学校	1	14	徒歩
城坤小学校	3	94	バス
城北小学校	1	33	徒歩
城西小学校	3	98	徒歩
城東小学校	3	100	バス
本島小学校	-	4	フェリー
合計	11	343	

※クラス数、児童数は2023年6月時点の数字

■実施内容

令和5年度「スクールプログラム
全小学3年生来館事業(仮称)」研修会

日 時 ● 8月2日(水) 9:00~11:00

対 象 ● モデル校6校の教頭

内 容 ● スクールプログラムについて解説と今後の連携に向けての協議

場 所 ● 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

令和5年度「スクールプログラム
全小学3年生来館事業(仮称)」合同説明会

日 時 ● 10月24日(火) 16:00~17:30

対 象 ● モデル校6校の教職員

内 容 ● 作品鑑賞、館内見学、体験学習コースを実演交えながら説明

場 所 ● 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

令和5年度 丸亀市教頭研修会

日 時 ● 2月15日(木) 16:15~16:30

対 象 ● 市内16校の教頭

内 容 ● 本年度モデル校6校へのヒアリング、次年度モデル校10校に向けて企画の趣旨説明

場 所 ● 丸亀市生涯学習センター

「左官職人になろう!」 作品展示

開催日 ● 2023年4月21日(金)~23日(日) 各日10:00~18:00

入場者 ● 425名



「左官職人になろう!」は、香川県左官業組合連合会と四国化成ホールディングス株式会社の協力のもと、2021年度から継続して実施したワークショップです。2年間の活動の集大成として、参加者と左官職人がコラボレーションして制作した作品を造形スタジオで一般公開しました。

コテの軌跡から伝わる、躍動感!

展示した作品は、2022年度に実施したワークショップの中で、参加者が5人1組になって制作した900mm四方の大型の壁12点です。塗材を塗り広げるコテや指の跡がくっきり見える作品からは、左官職人に教えてもらった技術を使いながら、自分らしい描き方で壁を作ろうと奮闘した参加者の様子が見てとれます。

また展示期間中には、来場者が左官技術を体験できる関連イベント「左官の技にチャレンジ!」を実施しました。本物のコテと塗材を使って壁作りを体験してもらい、子どもから大人まで多くの方々に楽しんでいただきました。

「左官の技にチャレンジ!」

本イベントでは、地元企業である四国化成ホールディングス株式会社の技術者から、一人ずつ順番にコテの持ち方や塗り方、模様の付け方などを教えてもらいながら、壁作りを体験しました。日常ではあまり接点のない技術者に直接教えてもらえると思った参加者は、恥ずかしそうにしながらも、真剣な面持ちで挑戦しました。しかし、板に塗る前に塗材がコテから落ちてしまったり、均一に塗り広げられなかったりと、想像以上に難しく、同じ技に何度も挑戦する参加者がいました。一方で、目の前で軽々とコテを使いこなす技術者に憧れの眼差しを向け、「左官職人になる!」と技術者に話す参加者もいました。体験後には、再度、展示作品をじっくり眺める方も多くいらっしゃいました。その姿から、一人ひとりの体験時間は短かったものの、素材に触れ、技術を体験したことで、左官への興味・関心が高まったように見受けられます。



まとめ 身近にある「壁」に目を向け、地元の技術者と交流し、伝統技術に触れることによって、作品を見るだけでは気づかなかった発見や驚きがつまった展示となりました。今後もさまざまな体験を通して、素材や表現方法への理解が深まるプログラムを企画していきます。(MÖ)

【イベント協力】四国化成ホールディングス株式会社

1947年に丸亀市で創業。現在では、世界を舞台に化学品と建材の2つの事業を展開。「独創力で、“一歩先行く提案”型企業へ」を掲げ、独創的なアイデアで社会課題を解決し、世界をリードする企業になることを目指す。2023年1月より持株会社体制へ移行し、各事業を分社化、新生四国化成グループとしてスタートを切った。

ものづくりワークショップ 「セロファンで絵をつくろう！」

開催日 ● 2023年5月4日(木・祝)・5日(金・祝) 各日10:30~12:00 / 14:00~15:30

参加者 ● 93名



猪熊弦一郎は絵画だけでなく、公共空間の壁画や出版物の表紙絵、グラフィックやテキスタイルデザインなども手がけ、作品を通して人々の生活を彩りました。本ワークショップでは、猪熊のデザインの仕事に注目し、制作で用いられたことがあるセロファンと紙を使って、絵をつくるプログラムを実施しました。

セロファンが重なって生まれる自由な形と色

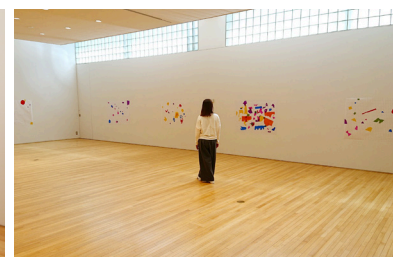
最初に、職員が猪熊の画業や幼少期のエピソードを紹介しました。画家・猪熊の仕事について理解を深めた後、参加者は好きな色のセロファンを3枚選び、ハサミで好きな形に切って方眼紙に糊で貼り付けました。完成した絵はそのまま飾ることもできますが、今回はコピーした絵を使ってラッピングにも挑戦しました。

最後は、8人グループになって、大きな方眼紙で1枚の絵を完成させるプログラムを行いました。全体のバランスを考えながら、一人ずつ順番にセロファンを切って貼っていくことで、グループでしか作ることのできない作品が完成しました。この作品は造形スタジオで一般公開し、多くの来場者にセロファンから生まれた表現を楽しんでもらいました。

本ワークショップで使用した素材はセロファンと方眼紙の2種類だけです。セロファンはお菓子の包み紙としても利用されている身近な素材で、光沢があり、重ねることで色が変わります。そのようなセロファンの特徴を活かし、方眼紙の罫線を使って配置やバランスを考えながら絵を完成させました。しかし、絵を完成させるだけではありません。完成後の活用方法の一つとして、コピーした絵を使って自身の持ち物や小箱を試みに包んでもらいました。すると、絵の見え方が変わったことに驚いたり喜んだりする参加者の姿が見受けられました。また包み終えると、保護者へプレゼントする参加者の姿もあり、自分だけでなく大切な家族や友人に喜んでもらいたいという気持ちが芽生えたようでした。

参加者の声

- 絵と聞くと少しいやでしたが“きっちりする”ならおもしろいと思いました。
- いのくまさんもきょうみをもったセロファンで方眼紙に絵をかけて面白かったです。
- セロファンは初めてだったので材料の幅が広がりました。



まとめ

セロファンを使用したことで、造形への興味関心が深まったり、素材に対する見方が変化したりしました。今後も生活の中にある美に目を向けるきっかけとなるプログラムを企画していきたいと考えています。(MŌ)

MIMOCA ＼ここ見て!／マップをつくろう

開催日 ● 2023年6月24日(土) 10:30~12:00、7月2日(日)・17日(月・祝) 10:30~15:00

参加者 ● 14名



子どもたちの視点でMIMOCAの魅力を発見してもらうこと、また、それを周りの人に伝えるにはどう情報を整えたら良いか考えてもらうことを目的として開催しました。本ワークショップは3日間かけて実施し、美術館探検や話し合い、マップづくりといった編集作業を行いました。

子どもが見つけたMIMOCAの魅力とは?

本格的なマップづくりを目指すため、編集のプロである須鼻美緒氏を講師にお迎えし、情報の集め方・まとめ方・見せ方を教えていただきました。

1日目は、館内を探検。参加者は、五感で美術館を感じ、「水のカーテンのようなものがあった」、「まどからカフェ、えき、かみのけみたいな作品などがみえる」、「いすにすわるとなめになってすーってなった」など、子どもならではの視点で気になるポイントをたくさん挙げてくれました。

2日目、3日目は、話し合いとマップづくりを行いました。まずは、「編集長」、「イラストレーター」、「ライター」、「カメラマン」など、グループ内で役割を決めました。そして、集めた情報をもとに下書きをします。下書きが終わったら、清書をします。須鼻氏のアドバイスのもと、「タイトルは目立つ色で太字にしよう」、「めくる仕掛けをつくろう」など、読み手が見やすく、また楽しめるように工夫しました。

「MIMOCAを探検! こどもガイドツアー」

本ワークショップの成果発表として、こどもガイドツアーを実施しました。ツアーでは、ワークショップの参加者が、マップをもとにお客さまをご案内しました。「ゲートプラザにある作品のタイトルは何でしょう?」とクイズを出題したり、「カスケードプラザの黒い壁を触ってみましょう」と声掛けをしたりして、和気あいあいとしたツアーとなりました。

ツアー参加者の感想

- 造形物のひとつひとつの名前の不思議、子どもならではの視点での面白さ。
- 子どもたちそれぞれのポイントを知れた。
- 子どもの素朴な視点が知れて良かった。



まとめ 本ワークショップで制作した「MIMOCA＼ここ見て!／マップ」は、現在、MIMOCAにご来館いただく一般のお客様に実際に手に取ってご覧いただけるよう、複製を準備しています。子どもの感じ方、見方を多くの方にご覧いただき、楽しんでいただけるようにします。(SS)

【講師】須鼻美緒(すばなみお)

編集者。東京のデザイン専門出版社にて書籍編集の経験を積む。2015年香川へ移住。「せとうち暮らし」「せとうちスタイル」編集部で5年勤務の後、2020年書籍やウェブの編集などを行う株式会社モーイを設立。

選んでミックス☆ MIMOCA缶バッジ!

開催日 ● 2023年8月9日(水)・10日(木)・12日(土)・13日(日) 各日10:00~12:00/14:00~16:00

参加者 ● 639名



夏休みの旅行・帰省でMIMOCAに来館し、素敵な時間を過ごした思い出を形に残して持ち帰っていただけるよう、自分だけの缶バッジを制作するワークショップを実施しました。誰でも気軽に楽しめる簡単な制作工程で、子どもから大人まで、幅広い年齢の方々にご参加いただきました。

夏の思い出をMIMOCAで

参加者はまず、MIMOCAの天井や階段など、いろいろな場所で撮影された建物の写真から「気になる1枚」と、その写真にコラージュするための素材を選びます。そして、カラフルな紙やシール、切手や紐など、さまざまな素材を選んだ写真に飾り付けます。紙を切って貼ったり、シールでカラフルに彩ったりするなどして、自分だけのコラージュを制作しました。

次に、完成したコラージュに型紙をあてて、どの部分を缶バッジにするか決めます。缶バッジにするポイントが決まったら、丸く印をつけて、はさみで切り抜きます。切り抜いたコラージュをスタッフに預けたら、あとはスタッフが専用のマシンでプレスして完成です。出来上がった缶バッジを、洋服や鞆につけて楽しんだり、大切な人への贈り物にしたりする参加者もいました。

「キッズサポーター制の導入」

本ワークショップをよりよいプログラムに仕上げるため、企画段階から運営に関わってもらうキッズサポーターを募集しました。今回参加してくれたのは、小学1年生から小学5年生の合計4名。一足早くプログラムを体験してもらい、参加者としての目線でアドバイスをもらいました。

キッズサポーターには、ワークショップ開催の2週間前に集まってもらい、職員より今回のプログラムの内容を説明しました。そして協力してほしいことを二つ伝えました。一つ目は、MIMOCAを探検してお気に入りの場所を見つけ、コラージュの土台となる写真を撮影することです。子どもならではの眼差しで撮影された写真は、ワークショップ本番に参加者へコラージュの土台として提供されました。

二つ目は制作手順のブラッシュアップです。実際に缶バッジを制作した後に、困ったところや難しかったところを話し合いました。

「プレスすると、缶バッジの端のデザインが巻き込まれて表からは見えなくなるので、作る前に教えてあげられた方が良いかも?」など、次に参加する人が楽しめるよう意見を出してくれました。このようなキッズサポーターの活躍があったからこそ、多くの方々の思い出に残るワークショップを実施することができました。



まとめ

夏休み期間を利用して、3世代のご家族や、20代のグループなど、幅広い年齢層の方々に缶バッジ制作を楽しんでいただきました。今後も、子どもだけではなく、大人も一緒になって楽しめるプログラムを通して、誰もがMIMOCAを身近に感じることができる企画を検討していきます。(M〇)

みんなで壁画をつくろう

開催日 ● 2023年10月13日(金)~15日(日) 各日10:30~16:00

参加者 ● 509名



大きな画用紙に絵を描く体験や、ひとりでは出来ない表現の楽しさを見出し、
てもらうため、入れ代わり立ち代わりの参加が可能なオープンスタジオ形式で
開催しました。

みんなで色や線を重ねよう!

3日間の開催で3枚の大きな壁画を完成させることを目指して、プログラムを
構成しました。そのため、1日ごとに、横10m縦3.6mの大きな画用紙を机の
上に広げ、自由に絵を描い
たり、他の誰かが描いた絵
に色を塗ったり線を重ねた
りしていきました。使用画材
は、クレヨンとパステル、
シールの3種類としました。
気軽に立ち寄って参加できる
プログラムとなるよう、申込
不要、入退場自由の参加
方法をとりました。



【多様な人の参加を呼びかけ】

- 各日11:00~12:00の1時間は“赤ちゃんタイム”とし、
画用紙を机から床に降ろして描いてもらいました。
椅子に座って絵を描くことが難しい年齢の子どもにも
参加しやすい環境をつくりました。
- 一般での参加が難しい方に向けて、別枠でお申込み可能である旨をチラシに明記しました。
チラシは、WAM(福祉医療ネットワーク)を活用して、市内の就労支援施設や児童発達支援
施設に郵送しました。



【描くきっかけづくり】

- 造形スタジオの壁面に「頭に浮かんだ色や形を描いてみよう」や、「みんなの絵に色や線を
重ねてみよう」と呼びかけを掲出し、みんなで1枚の壁画をつくりあげること意識できる
ようにしました。

【作品公開】

- 3日間で完成した作品を一般のお客様に向けて造形スタジオで公開しました。巨大画用紙
を展示するために、横10m縦3.6mの木枠を壁に設置しました。その木枠に画用紙を張る
ことで立体感を出し、作品として迫力を持たせました。
- 来場者がその場で参加できるアクティビティとして、○△□のシールを用意し、シールで絵が
描けるようにしました。会場の壁面に「頭に浮かんだ色や形をシールで描いてみよう」と呼び
かけ、次々に色を重ねたり、自由に形をつくりたりできる体験が出来るようにしました。



参加者の感想

- MIMOCAでは未就学児向けのワークショップは中々ないので、今回参加出来て良かった。

まとめ

入退場自由のオープンスタジオ形式は、今までMIMOCAのワークショップに参加したこと
のない未就学児や、申込制のワークショップに躊躇する保護者の方々でも気軽に参加でき
ました。開かれた美術館として、より多くの方々に気軽に来館していただけるよう、今回
のような受け入れ体制を、引き続き検討したいと思います。(SS)

「すうじであそぼう！」

- ワーク
ジョブ** 開催日 ● 2023年11月23日(木・祝) 10:30~12:00
参加者 ● 24名
- オープン
スタジオ** 開催日 ● 2023年11月23日(木・祝) 13:30~15:00、11月25日(土)・26日(日)・
12月2日(土)・3日(日)・9日(土)・10日(日) 各日10:30~15:00
参加者 ● 526名



大きさや日時を示す時などに使用される数字。そのような数字のもつ意味を切り離し、カタチそのものに着目してさまざまな活動を行なっているユニット「すうじのつぶやき」を講師として招聘し、数字を新しい見方で楽しむ2つのプログラムを実施しました。

“すうじ”でつくる不思議な世界

「ペタペタおめん」

事前申込制のワークショップで、6歳から12歳まで24名の子どもたちが集まりました。最初に講師から、いつもと違う自由な“すうじ”の在り方についてお話を聞いた後、0から9までの数字を組み合わせて、お面を作りました。参加者は、同じ数字でも角度を変えるだけで多彩な表情を作ることができることに驚きながら、数字をお面の台紙に貼り付けました。完成後はお面をつけて館内を散策し、一般の来館者へ披露しました。

「どんどんジャングル」

造形スタジオが開場している間は予約不要で、自由に出入りできるオープンスタジオ形式で、通算7日間開催しました。数字を重ねたり、ひっくり返したり、つなげたりしながら、大きなじゃばら板に貼り付けて、数字のジャングルを作りました。

「どんどんジャングル」は、子どもから大人まで年齢や国籍に関係なく、多くの方々に参加いただきました。じゃばら板に来場者一人ひとりの数字を、時間をかけて積み重ねていきました。

【制作STEP】

1. じゃばら状に置かれた大きな板を見て回り、どんなカタチにしようか考えます。
2. 3種類の大きさの数字から、好きな数字を3枚選びます。
3. 選んだ数字に糊を付けます。
4. 糊付けした数字をじゃばら板に貼りつけて、植物や生き物などを作ります。

どんなカタチを作ろうか考えこむ人、他の人が作ったカタチに自分の数字を付け足す人。色々な人が数字を重ねていき、一人では作ることのできない大きなジャングルが完成しました。来場者からは「いつも算数の時間の時との数字とぜんぜんちがっておもしろかったです」「みんなで増やしているんな形ができてるのがおもしろかったです」という声をいただきました。

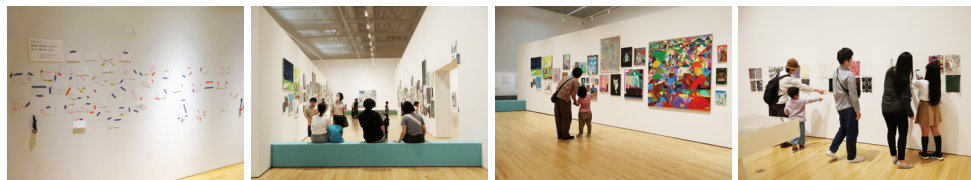


まとめ どちらのプログラムでも、始めは数字を使ってどのようなカタチを作れば良いかわからず戸惑う参加者もいました。しかし、他者の表現を見て、数字を組み合わせる面白さに気づき創作意欲が湧いていく様子が印象的でした。今後も、身近なものに対して、今までと違う見方や感じ方を提案するようなプログラムを企画していきます。(MŌ)

【講師】すうじのつぶやき

西森そのの(アーティスト)と湯浅亮(warisasi デザイナー)によるユニット。
普段見慣れた「数字」を自由なカタチ「すうじ」と考え、子どもも大人も楽しめるプログラムを展開中。

親子でMIMOCAの日



高校生または18歳未満の観覧者1名につき、同伴者2名まで観覧無料になるプログラムです。保護者の方々に、子どもと一緒に気軽に来館いただけるよう、各展覧会の関連プログラムとして、会期中に一回開催しています。

来館するご家族に作品鑑賞を楽しんでもらうため、展覧会の内容に合わせた鑑賞促進の取り組みを考えています。

Ⅰ山城知佳子 ベラウの花

企画展期間 ● 2023年3月21日(火・祝)～6月4日(日)
実 施 日 ● 4月22日(土)・23日(日)
利 用 人 数 ● 22日 163名 / 23日 195名

【取り組み】

じっくり映像を見てもらいきっかけをつくるため、展示の特徴である「音」に注目した問いかけを考えました。展示室で聞こえた音を、受付で配布した手元の「音メモ」に書き、展示室横の廊下に貼り付けてもらいました。

【参加者の反応】

「展示室で音を探してみよう!をキッカケにどんな音がしたか美術品との触れ合い方がわかった。」や「親子でこんなに耳を傾けながらみた作品ははじめてで新鮮でした。」などの感想をいただきました。

Ⅰ須藤玲子:NUNOの布づくり

企画展期間 ● 2023年10月8日(日)～12月10日(日)
実 施 日 ● 11月4日(土)・5日(日)
利 用 人 数 ● 4日 151名 / 5日 126名

【取り組み】

本展の特色の一つである、実際に作品に触ることが出来る「NUNOの触って布」エリアにおいて、子どもたちに触覚で布を感じてもらうため、スタッフを常時1名配置し、積極的に声掛けを行いました。

【参加者の反応】

子どもたちは、それぞれがお気に入りの布を見つけているようでした。スタッフがどの布が好きか聞いたところ、「《籠の目》が好き。伸びる。直感。」、「《あられこぼし》が好き。ふわふわ。ここがハムスターみたい。」と話してくれました。

まとめ

赤ちゃんの美術館デビューとして利用するというアンケートの声も多くいただきました。引き続き、本イベントを認知いただけるように、SNS等での事前告知を行い、より多くの来館を促します。また、来館するご家族に対して、作品を通して楽しい会話が生まれるような鑑賞促進の取り組みを考えます。(SS)

Ⅰ中園孔ニ ソウルメイト

企画展期間 ● 2023年6月17日(土)～9月18日(月・祝)
実 施 日 ● 7月8日(土)・9日(日)
利 用 人 数 ● 8日 148名 / 9日 184名

【取り組み】

絵の見方の一案として、「遠くから見たり、近くから見たりしてみよう」という呼びかけ用紙を配布しました。美術館に来たことがない子どもでも、作品を楽しく鑑賞出来るきっかけとなることを試みました。

【参加者の反応】

展示室では、子どもが何かを発見したように中園作品を指差しながら、親子で鑑賞する姿が多く見られました。

Ⅰ回復する

企画展期間 ● 2023年12月23日(土)～2024年3月10日(日)
実 施 日 ● 1月20日(土)・21日(日)
利 用 人 数 ● 20日 207名 / 21日 205名

【取り組み】

さまざまな手法で表現された7人のアーティストの作品をよく見てもらうため「どの作品が気になったか教えてね」という問いかけ用紙を配布しました。展示室入口に作家ごとにまとめた作品シートを設置して、鑑賞後にシールを貼ってもらいました。

【参加者の反応】

シールで簡単に参加できる手軽さから、未就学児から小学校高学年までの幅広い年齢の子どもたちが参加してくれました。また、選んだ理由も積極的に書いてくれました。保護者からは「子供が一生懸命言葉を選んでいるのが印象的でした。」との感想もいただきました。

+ MIMOCA

「心の病院」として、人々の明日への活力を与える場所として、

美しいものや表現に出会うことで

新しい交流と価値を見出すプログラムを提供する事業。

人々の暮らしの中にMIMOCAがプラスされていくことを目指します

博物館実習



美術館を知る、考える5日間

博物館学芸員資格取得を目指す方や美術・美術館に関して研究を行っている方を対象に、博物館実習受け入れをWEBにて開示し、応募があった5名の学生に対して博物館実習を行いました。

カリキュラムは学芸企画・研究をはじめとした各種の専門業務や美術館運営に関する講義、作品の取り扱いや調査、実習を中心に組みました。作品管理の実習では当館の収蔵庫に入り、紙作品とキャンバス作品のチェックを行う実務を体験しました。教育普及の講義では文化芸術基本法やICOMの事例をもとに博物館の多様な役割を紹介することで「美術の力を信じたくなった」という反応もあり、これからの文化芸術を支える人材に希望を与える機会にもなったと考えます。

実習全体を通して、当館の理念や特性、猪熊の画業を理解した上で、今後求められる『誰もが利用できる博物館、美術館についてのあり方』を実習生自身の言葉で他者に伝えることができるレベルまで達することを目指しました。



カリキュラム	1日目	美術館概要及び運営に関する説明、猪熊弦一郎の画業や常設展の講義
	2日目	作品管理、著作権、企画展の講義
	3日目	作品管理の実習、近隣店舗や商店街の見学、収益事業の講義
	4日目	教育普及・連携交流事業の講義及び実習
	5日目	広報事業の講義、教育普及の実習、博物館実習全体の振り返り

まとめ 館実習は5日間という限られた期間での取り組みとなりますが、美術館現場での実習や講義を通して得た知見が、今後の実習生の活動や研究に還元されていくために、今後もより良いカリキュラムを提供していくことに努めます。(MO)

「須藤玲子:NUNOの布づくり」関連プログラム 須藤玲子 つぎつぎ布ワークショップ

開催日 ● 2023年10月21日(土)・22日(日) 各日11:00~15:00

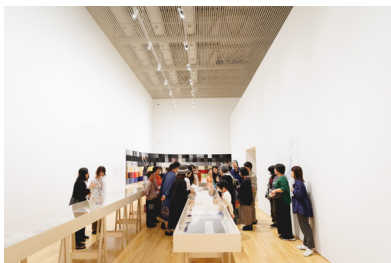
参加者 ● 53名



企画展の出品作家である須藤玲子氏を講師に迎え、ワークショップを開催しました。出品作家との交流を通して、NUNOの活動への理解を深めてもらうことを目指しました。

触って知ろうNUNOの布

須藤氏より展示会の解説をしていただいたあと、NUNOの布を使ってオリジナルのスカーフや風呂敷を作りました。プログラムは4時間に及びました(内1時間はお昼休憩を含む)。



【プログラムの流れ】

①講師による展示室ツアー

まずは、本展にあわせて制作された新作の解説からスタート。ゲートプラザではためく《ビッグバステルドローイング》、エントランスホールの吹き抜けに展示している《顔80》を鑑賞し、会場である3階展示室に移動しました。展示室内では、各エリアで立ち止まりながらじっくりと展示物についてお話いただきました。

②制作

ツアー後、造形スタジオに移動し、制作に取り掛かりました。スタジオには、たくさんの布が用意されました。

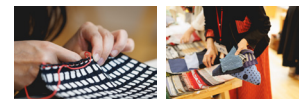
- ① 参加者は、スカーフをつくる場合は7枚、風呂敷をつくる場合は9枚の布を選びます。
- ② 布を選び終えたら、糸を選びます。
- ③ 選んだ布の配置を決めます。
- ④ 布を縫いあわせます。

③須藤氏による講評

スカーフや風呂敷の出来栄え、布と糸の組み合わせなどについてコメントをいただきました。

④参加者全員で記念撮影

出来上がったものを身に着けたり手に持ったりして、記念撮影を行いました。



ワークショップ参加者の感想

- 展示室ツアーがあつてとてもよかったです。
- 素敵な布ばかりの中、選ぶ楽しさ、集中してチクチクする楽しさ、満喫させていただきました。
- 布の種類、色、柄のみではなく、質感を楽しむことができました。
- 布にはストーリーがあつてすごいと思いました。布えらびやぬうのが大へんだったけど、かわいいのができてうれしかったです。

まとめ

グループ内で、お互いの布を見せ合ったり、意見交換をしたりして制作を進める姿が印象的でした。本ワークショップのように、制作を通して参加者同士の交流が生まれるプログラムを実施出来るよう、今後も企画を検討したいです。(SS)

【講師】須藤玲子(すどうれいこ)

1953年茨城県石岡市生まれ。株式会社 布 代表。東京造形大学名誉教授。

日本の伝統的な染織技術から現代の先端技術を駆使し、新しいテキスタイルづくりをおこなう。

企画展「回復する」関連ワークショップ つないでつくる つなぎんぐ

開催日 ● 2023年11月12日(日) 13:30~16:30

参加者 ● 11名



アーティストの小金沢健人氏を講師に迎え、企画展「回復する」の出品作品と近い制作方法で、ソフトパステルやクレヨンなどの画材を使ったワークショップを開催しました。

偶然と即興を楽しむ

本ワークショップは、成果物や出来上がりよりも、この時間・この場所で偶然出会った参加者たちが目の前のものに向き合って好きなように描いていくことや、各自の感覚で色を重ねるという制作のプロセスに重点を置いて実施しました。



それは、講師の小金沢氏の「個人が個人のままでグループに参加し、ひとつのことに取り組み、だれのものでもないものをつくる」という言葉や、「偶然できた色、形がつながってつくられていくことを目いっぱい楽しんでもらいたい」という想いを実現するものでした。

参加者は制作を通して作家の考えと実践を体験しました。制作手順は次の通りです。

【制作手順】

1. まずは、参加者が「つなぐ」ことを意識するために、ことばをつなぐゲーム、からだをつなぐゲームを行いました。
2. 次に、参加者それぞれがパステルやクレヨンで画用紙に好きな形を描き、隣の人へ紙をまわして形の周りを思い思いの色で塗り、最終的には周りに塗られた色や全体の雰囲気を見て、「この絵にぴったりだと思う色」を各々が選んで形の中を塗りました。
3. 次は白い画用紙を一人2枚ずつ使い、紙の重なりあった部分を両方にまたがって描き、時間が来たらどちらか1枚を隣の人へ回し、回ってきたら描き、また回していく、というプロセスを繰り返しました。
4. つづいて、描いていた紙を2枚とも折り、それらを上下に回転させたり、裏表をひっくり返して重ねたりして、余白に描いたり、上から描き加えたりしていきました。
5. さらに、紙に切れ込みを入れ、組み立てて立体にしました。
6. 最後に、作品を造形スタジオに並べ、小金沢氏による講評を行いました。



まとめ

制作した作品の一部が企画展「回復する」に出品されました。自分が関わった作品が現代美術館の展覧会で展示されるということは、参加者にとって日常では体験できないことだったのではないのでしょうか。今後も企画展と連動したプログラムを通して、作家の考えや出品作品に対する理解を深められる機会を増やしていきたいと考えています。(JM)

【講師】 小金沢健人(こがねざわ たけひと)

アーティスト。武蔵野美術大学を卒業後、渡独。現在は京都芸術大学客員教授。映像やドローイングに加えて光や煙、音、日用品なども用いて空間を変容させる。国内外の美術館やギャラリーでの展覧会のほか、舞台の演出やアート／音楽イベントのディレクターなども手がける。

開館32周年記念イベント MIMOCA'S BIRTHDAY タコスパーティー

開催日 ● 2023年11月23日(木・祝) 10:00~14:00

参加者 ● 約950人



毎年、11月23日の開館記念日には一年に1回の特別な日として、日頃の感謝を込めて、全館入場無料のほか、さまざまプログラムを実施してきました。

本年は、猪熊がMIMOCAに込めた思いを「おもてなし」としてご用意し、改めてみなさまにご紹介しました。アート・コミュニケーションではパブリックプログラムとして「タコスパーティー」を企画・実施しました。

美しいもの、楽しいものと出会う時間

**“タコは日本でタコスといいますが、今ハワイで大流行で、安くて簡単でおいしくて、
たちながらでも食べられるのでとても楽しいものです”**

「わが家のランチ 猪熊ふみ子」『ミセス』第293号、昭和56年11月7日 発行、p.202

猪熊の妻であり、社交的な文子夫人はパーティーでタコスをよく提供していました。そこに着目し、猪熊夫妻の「おもてなし」を参考にみんなで食を楽しむプログラムとしました。美術館の正面玄関であるゲートブラザを中心にタコス、ドリンク、デザートなどを提供するブースを展開。猪熊夫妻にならい、高級な食材を用意することよりも、誰もが気軽に楽しめる食の提供と空間作りに注力しました。

ブース

MASACASA TACOS マサカサタコス、季節を食べる食卓numa+百姓ミラクル、寧日、へちま文庫、久福ブルーイング本島、旅するドコデモく食堂、旅ベーグル&スパイス、地域に出会う商店 ふじたしょうてん、mitosaya薬草園蒸留所+CAN-PANY

来場者が思い思いにパーティーを楽しむことができるよう、当日用意した工夫をご紹介します。

ポイント①

タコスパーティーで盛り付けるためにハーブや野菜をタネから育てました。開館記念日には見て楽しみ、食べて楽しむための小さなお庭“ウェルカムガーデン”として来場者をお出迎え。ゲートブラザに彩りを加えました。タコスの楽しみ方を提案するハンドアウトも当日配布しました。



How to Enjoy Tacos? タコスの楽しみ方

[STEP 1] 好きなトルティーヤとドリンクをショップで購入。

[STEP 2] お好みでお惣菜やハーブをトッピング。パシャッと撮影しSNSでシェア。

[STEP 3] こぼさないようにしっかり摘んで、パクッといただきます。

ポイント②

AISOという新しい自動BGM構築システムを駆使して、猪熊が所有していたカセットテープを参考に KraftwerkやYMOが手がけた70年代~80年代の名曲の数々をBGMで演奏。居心地の良い空間で、楽しい交流の時間を生み出しました。



※スタッフ撮影

参加者の声

- こんなハッピーなイベントをありがとうございます。(市外の方)
- たいへん楽しい時間でした。来年の33周年記念も来れるように長生きするわな。(地域住民)

まとめ

パーティー当日はスタッフに「おめでとうございます」とお祝いの気持ちを伝えてくれる来場者の方もいらっしゃいました。今後も猪熊の教えを大切に、人々の賑わいと交流を創出する活動を続けていきたいです。(MO)

●演出:江口宏志(mitosaya薬草園蒸留所) ●フード・ディレクション:小川拓人 ●グラフィックデザイン、サイン:三宅瑠人、岡崎由佳
●グリーンサム:藤田崇(フジタシード) ●企画協力:長谷部文子(株式会社Largo) ●企画・運営:丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

「回復する」関連プログラム 日光で描くフォトグラム～ 青写真をつくろう！

開催日 ● 2024年2月12日(月・祝)10:00～16:00
参加者 ● 19名



企画展「回復する」出品作家で写真家の兼子裕代氏を講師に迎え、会期中にワークショップを開催しました。兼子氏は2021年から、北カルフォルニアの植物栽培園でスタッフの方々と美術の創作活動を行っています。その活動の1つであるサイアノタイプ(青写真)に挑戦しました。

カメラ不要の古典技法で、写真に親しむ

植物やクリップ・輪ゴムなどのオブジェ、画像のデジタルネガフィルム、更に、メッセージやイラストを描いた透明フィルムを用いてサイアノタイプを制作しました。



【プログラムの流れ】

①講師のお話

兼子氏から、写真の古典技法のひとつであるサイアノタイプの歴史や魅力を説明いただきました。熱心に耳を傾けながらメモを取る参加者もいました。

②印画紙作り

いよいよ制作開始です。用意された水彩紙や四国の和紙から、参加者は水彩紙1枚と好きな和紙2枚を選び、薬品を塗布し乾燥させました。

③作品鑑賞

兼子氏が「回復する」展に新作として発表した《Mirrors of Happiness》を鑑賞しながら、直接、作品について解説いただきました。

④植物採集

鑑賞後は館外に出て、周辺を散策。道の傍らに生える草花を吟味しながら集めました。

⑤レイアウト作り～露光～水洗

- ① 採集した植物や、自宅から持ってきた物、イラストを描いたフィルムなどを②で制作した印画紙の上に並べます。
- ② アクリル板を印画紙の上に置き、オブジェを固定した後、屋外のカスケードブラザへ移動し15分ほど日光に当てます。
- ③ スタジオに戻り、印画紙を水で洗い流します。

⑥鑑賞

最後に、完成した作品を全員で鑑賞し、それぞれの作品に対して兼子氏からコメントをいただきました。参加者は嬉しそうな様子で制作の工夫を発表したり、お互いに質問あったりして、交流を深めました。

ワークショップ参加者の感想

- 遠い国で暮らす人々の心の奥が垣間見れた事、芸術の素晴らしさ、生きていく上での必要性。素材のおもしろさ、自身を再確認できる感覚等、楽しい1日でした。
- ドローイングでは出ない植物のせんさいな線はとても美しかったです。写真って面白いなあ。

まとめ

兼子氏に、植物栽培園での活動について質問したり、制作へのアドバイスを求めたりと熱心に取り組む参加者の姿が印象的でした。古典技法に親しむことで思いがけない驚きや気づきを得ました。また作家の活動を追体験することで、作家や作品についても理解を深めることができました。このようなプログラムを今後も企画していきます。(M〇)

【講師】兼子裕代(かねこひろよ)

青森県生まれ。大学卒業後、会社員を経てロンドン(イギリス)で写真を学ぶ。
2021年よりカリフォルニア州オークランド(アメリカ)にある植物栽培園、プランティング・ジャスティスに参加し、スタッフと一緒に美術の創作活動を行っている。



【広報】

アート・コミュニケーションでは、美術館及び猪熊弦一郎のプレゼンスを高めることと展覧会、ミュージアムグッズ、イベントなど当館での多種多様な事業を広く伝えることを目指して、プレスリリース発行、WEBサイトやSNSの運用、広告出稿などの広報活動を展開しています。ここではマガジンとSNS強化についてご紹介します。

MIMOCA マガジン

職員が伝える、MIMOCAの魅力

「MIMOCA マガジン」は当館のWEBサイトにて2020年からスタートしました。館の媒体を使って展覧会の情報発信をすることが当初の目的でした。取材対象者や記事を執筆するライターから積極的に発信してもらうことで注目度を上げることも考えていました。3年間、各展覧会の出品作家や企画者への取材を実施した結果、マガジン自体は展覧会の魅力の深掘りに繋がり、記事が美術館の取り組みのアーカイブとして機能していると自負しています。しかしながら展覧会のみの記事では更新頻度が3~4ヶ月に1回と低く、情報発信の媒体としては不十分です。

そこで本年度からMIMOCAの魅力を多角的にレポートしてお届けするWEB広報誌となる媒体へと改めました。レポート内容やテーマも美術館職員が各自で考えるものと決めました。



編集方針

- 論考ではなく、読み物として高校生以上が読めるものとする
- WEBでのイベントページやSNSでの内容以上の深掘りとする
- 作家や招聘アーティストの言葉を残していく
- 文字数500~2,000字とする

まとめ

さまざまな専門性を有する職員が年に一回は必ず執筆あるいは寄稿を企画することにより、偏りなく多くの事業、コンテンツを登場させることが可能となります。頻度高く、鮮度ある情報を更新し続けることを目指します。(MO)

【2023年度掲載一覧】

- ・「中園孔ニ ソウルメイト」プレス内覧会レポート
- ・「中園孔ニ ソウルメイト」関連プログラム 評伝刊行記念トーク「穏やかなゴースト 画家・中園孔ニを追って」レポート
- ・「選んでミックス☆MIMOCA缶バッジ」レポート ・井上涼 寄稿「“ピフォアミモカ”ができるまで」
- ・「MIMOCA\ここ見て!マップをつくらう」レポート ・須藤玲子:NUNOの布づくり」二つの新作(前編)
- ・年末年始に贈りたい美術館グッズ5選~一緒に過ごす相手を思い浮かべながら選ぶ
- ・「須藤玲子:NUNOの布づくり」二つの新作(後編) ・開館32周年記念イベント MIMOCA'S BIRTHDAY レポート
- ・収蔵作品のご紹介 ニューヨークのインクマとムナカタ 二人の交流をめぐって

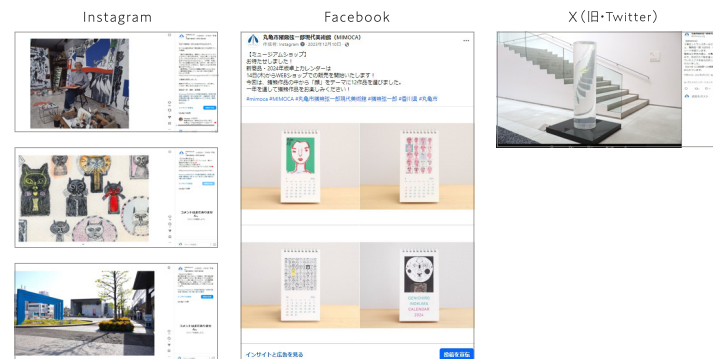
SNS強化

SNS時代を生きる美術館広報

当館はInstagram・Facebook・X(旧・Twitter)と3つのアカウントを運用しています。これらのSNSでは展覧会やイベントだけではなく、美術館の建築や猪熊作品についての情報発信を積極的に行っています。

本年度は内容が偏らないよう、曜日ごとにジャンル分けしたスケジュールを組み、投稿を行いました。展覧会開幕やイベントなど、告知時期が事前に予想できるものから、急な案件まである中、ジャンルが重複しないようスケジュールを調整しながら投稿しました。

猪熊が集めたコレクションにまつわるエピソード、「今日は〇〇の日」=記念日と絡めた所蔵品の紹介、スクールプログラムの活動内容など、今まで取り上げてこなかった情報を投稿することも意識しました。結果、フォロワー数も順調に伸びていき、コメント・いいねやリツイートの反応も増えつつあります。



■スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
休館のお知らせ	美術館について		イベント情報	展覧会情報	イベント情報	ミュージアムショップグッズの紹介

例えば、火曜日の【美術館について】で取り上げる投稿内容は以下の通りです。

- 猪熊の人物像やエピソード、言葉
- MIMOCAの建築について
- 館内のインテリア関係(家具、サインなど)
- 記念日と絡めた所蔵品(猫の日、母の日など)

まとめ

今後は、どのような内容であれば美術館に興味がない、行ったことがない人の心に響くのか、また、フォロワーが必要としている情報は何かというリサーチをしながら、SNSでの情報発信を続けていきたいと思っています。(MS)

鼎 談

美術館におけるアート・コミュニケーションの可能性

博物館教育に知見のある山本桃子さんと、

国内の様々な美術館や芸術祭などの広報を担当する市川靖子さん。

共に丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（以下、MIMOCA）と親交のあるお二人を交えて、
これからの美術館に求められる多様性と広報のあり方をテーマに、語り合いました。



左から順に、奥本、市川さん、山本さん

収 録：2024年2月5日
参 加 者：山本桃子（東京国立博物館）、市川靖子（株式会社いろいろ）
進 行：奥本末世（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）
編 集・構 成：福井尚子、橋本誠（合同会社生活と表現）

●子ども向けプログラムの広報

奥本 まずはそれぞれの活動についてお伺いできますか。

山本 私は現在、東京国立博物館（以下、東博）の教育講座室で仕事をしています。主に講演会の運営や、「キッズデー」という子どもを対象にしたイベントの実施、オンラインギャラリートークのコーディネート、特別展のためのジュニアガイドの制作などを行っています。東博に就職する前は、早稲田大学大学院で国内外のミュージアムでの学びについて研究し、イギリスやフィンランドをはじめ海外の施設を現地調査していました。

奥本 山本さんは2022年の夏に、教育普及のリサーチでMIMOCAを訪れてくださったのが、関係性の始まりですね。一方で市川さんには、広報アドバイザーとしてお世話になっています。

市川 アート専門の広報の会社を運営しています。元々は現代美術のギャラリーで勤務し、その後独立してフリーランスとしてアートフェアや美術館の広報を担当しました。今も国内の様々な芸術祭や美術館の広報を担当しています。MIMOCAから広報のご相談をいただいて、「広報のコーチング」をする立場として関わっています。

奥本 広報会議に出席いただいたり、大きな事業の内覧会に来ていただいたり、MIMOCAの広報事業全体のアドバイスをいただいていますね。

MIMOCAでは設立以来、猪熊が大事にしていた「子どものためのアート教育」ということを軸に歩んできました。お二人は子ども向けのプログラムの広報について、どのように取り組んでいますか？

市川 子ども向けのプログラムの広報をどうしたらいいかというご相談は良く受けますね。美術館にお子さんを連れてくるのは親なので、親にどう広報するかということから一緒に考えていきます。地域によって親の特性も異なると思うので、地域の特性も研究していますね。

最近、アートフェアにキッズプログラムが組み込まれるようになってきました。例えば、子どもたちがフェアに出品されている作品をギャラリストから購入してみるという擬似行為を通して、経済を学んでみるワークショップなど。子ども向けのプログラムは、企業が協力しやすいという側面もありますよね。

山本 東博でも、特別展を開催する際に「ジュニアガイド」という子ども向けのパンフレットを作る場合が多いです。展示会場での配布や関東圏の小中学校への送付のほか、全ページのPDFもWebサイトでダウンロードできるようにしています。

奥本 学校側にお知らせをすることも大切ですよ。MIMOCAでは、展覧会を見たり、ワークショップに参加したりするとスタンプをもらうことができる「キッズパスポート」を毎年丸亀市内の小中学校に送っています。山本さんのお話を伺って、改めて学校への案内はお互いの関係を築く上で大切だなと思いました。

市川 東博さんの「ジュニアガイド」は非常に読みやすく良いですね。親もこれを見たら、美術館に連れていこうと思うはずですよ。

山本 子どもでもわかりやすいという意味で、予備知識がない大人にも読みやすいものになっているんですよね。プレスリリースとは違う情報の絞り方をしています。

奥本 情報を絞るという意味で、MIMOCAでは、造形スタジオでのワークショップのチラシ裏に掲載している「親子でMIMOCAの日」のお知らせがそれに当たるかもしれません。カフェでお子様ランチの提供があることや、開催されている展覧会の子どものに向けたアピールポイントを、大人でも子どもでも読みやすい言葉で載せるようにしています。予算などが限られた場合でも、創意工夫できることはありますよね。



2023年7月のキッズデーで配布された東博のギャラリートークデビューカード（右）は、MIMOCAのキッズパスポート（左）から着想を得て制作されました

●造形スタジオから生み出すことができる多様性

奥本 山本さんがリサーチされる中で、ここの美術館のワークショップが良かったというところはありますか。

山本 フィンランドでは学校教育はもちろん、日常生活の中でも子どもに積極的な文化体験を推奨しています。ヘルシンキの国立アテネウム美術館では、一定の時間内に誰でも立ち寄って参加できる、というドロップイン形式のワークショップをしていました。同じ空間にスタッフもいるのですが、何か聞かれたら答える、というぐらいの関わり方で、積極的に口出しはしないんです。

奥本 日本では、先生がいて、プログラムを時間通りに進める、という形のワークショップが一般的ですよ。

山本 私もどこかに「きちんとやらなければ」という思いがあったのですが、これぐらいゆるやかな枠組みの中でも参加者にとって意味がある体験にはなりうるんだという気づきがありました。たまたま隣同士に座った小学生と、面識のないおじいちゃんが同じテーブルに座って、お互いの作品を介して交流が生まれていたのも良かったですね。

奥本 いいですね。MIMOCAでも今年度、申込不要で出入り自由の「オープンスタジオ」（pp.14・15参照）を開催したのですが、海外から一人でやってきた男性も参加してくれました。その時に、美術館の多様性は展覧会に限らず、スタジオひとつからでも生み出すことができるのだと感じました。

市川 美術館によっては、教育普及担当が他館の状況について知らないことが多いかもしれないですね。他の美術館にヒアリングに行くとか、ワークショップに参加してみるとか、美術館同士も横のつながりを持って、学び合うことができるといいですね。

●子どもたちに美術館を開くこと

奥本 東博では、子どもたちへ向けた美術館の特別開館などされていますか？

山本 親子連れの来館を促すために、年に数回キッズデーを開催しています。また私が学生時代にボランティアをしていた東京大学総合研究博物館インターメディアテクでは、学校見学の受け入れの際、開館前の時間に小中学生を案内していました。他のお客さんの目を気にしないで、自由に作品を見て、おしゃべりをして、気づいたことを言い合うことを目的とした、アカデミック・アドベンチャーというプログラムです。子どものために空間を区切ることの大切さをそのときに実感しました。ただ東博ぐらいの規模になると、開館時間前に開けると言っても、運営のことも考えなければいけないため難しい側面もありますね。

奥本 色んな考え方があってと思うのですが、私はどちらかというと、子どもたちはオープンな場でオープンな時間に受け入れたいなと思っています。というのも、公的な施設でどう過ごすかということを子どもたちが学ぶのも大事なのではないかと思っているからです。また、実際に子どもたちと一緒に館内を回っていると、生き生きと鑑賞している姿に周りの大人も理解を示して喜んでいることを感じます。一方で、特別に支援が必要であったりとか、人目を気にされたりする方は、開館前に受け入れる形もあるかなと思いました。MIMOCAでも以前、丸亀少女の家という少年院の子どもたちを開館前に展示室に受け入れたことがありました。

市川 いろいろな美術館が試行錯誤していますよね。朝の一時間はベビーカーを館内に持ち込んで鑑賞できる、としているところもあるようで、まだまだ試験段階のようですが概ね好評のようです。

奥本 ベビーカーもそうですが、日本はまだ、お母さんが美術館に赤ちゃんや子どもを連れてきてはいけないと思っている可能性もあります。赤ちゃんが美術館デビューしてもいいんだ、ということ、美術館側からも発信していけるといいですね。

●美術館と「食」のイベント

市川 開館32周年記念イベント、とても良かったですね。猪熊さんがかつてご自宅でゲストにおもてなしをしていたというエピソードを元に、来場者にタコスをおふるまうなど、集まりやすい環境を美術館が作っている、とても素敵なイベントでした。猪熊さんの人柄や精神も伝わったのではないのでしょうか。

奥本 ありがとうございます。この日は観覧料無料の他にも、猪熊夫妻がよくやっていたというタコスパーティー（pp.26・27参照）に着目してタコスを提供するブースを出したり、造形スタジオの事業としてワークショップを行ったりと全館総出でおもてなしをしました。イベントを監修されたmitosaya薬草園蒸留所の江口さんの提案で、ハーブや野菜のプランターを出し、自由につまんで、食べ物や飲み物にトッピングしてもよい、としたのが好評でしたね。コロナによる規制も緩和されたので、「食」を軸に様々な人が滞在を楽しむというプログラムが実現できたかなと思います。

山本 いいですね。東博でも展示内容に合わせたキッチンカーに入ってもらうことはありますが、全館をあけて食を通してミュージアムを楽しんでもらうというのは魅力的ですね。

奥本 市川さんは美術館で食を扱うことや、展覧会以外のことでアプローチをしていくことはどんどんやるべきだと思いますか？

市川 そう思います。ただ何を入れてもいいのではなくて、美術館が提供するものとして、ある程度のクオリティをコントロールすることは必要だと思います。美術だけではなく、ワークショップ

があるとか、良い食事がある、ということは、美術館の付加価値を高め、これから生き残っていくためにも必要じゃないかなと思います。

奥本 これまでの美術館における食のイメージって、展覧会に合わせたスペシャルメニューを出すことだったと思うのですが、最近では美術館の「食」自体がメインになるイベントもあって、展覧会を超えた試みが生まれているのかなと感じます。

●作品を観る以外の体験を発信する

山本 昔は美術館の体験といえば良い作品を鑑賞すること、というような視点があったかなと思うのですが、作品を観る以外にも、美味しいものを素敵な空間で食べたという経験を持ち帰ってもらってもいいし、館内のベンチでぼーっとして心が元気になった、でもいいんですよね。そういう場所としての楽しみ方や、色々な体験内容のチャンネルを運営側から発信するのも大切なかなと思いました。

奥本 そういう意味で、市川さんとお仕事させていただいて目から鱗だったのが、美術館のウェブサイトを人間行動学に沿って作った例もある、というお話でした。

市川 美術館のウェブサイトは、まず展覧会情報があって、おまけのようにワークショップやイベント案内があることが多かったかと思うのですが、イベントに行きたい人向けに「楽しむ」という項目を作るとか、「学ぶ」という項目を作ってギャラリートークや講座の情報を見せるなどするとウェブサイトが見やすくなるんじゃないかなと思っています。私、一番見やすいウェブサイトって東京ディズニーランド・ディズニーシーだと思ってますよ。今何をやっているのか、どこで何を見れるのか、何ができて何ができないのかが、すごくわかりやすいですよ。

奥本 視点が利用者に向いていますよね。私はこれまで、とにかく最新の情報を出すことが大切なのだと思います。でもお客さんはそれぞれ美術館に求めているものが違いますよね。特に多岐に渡ったプログラムがあるとき、ワークショップだけ参加したい人もいれば、展覧会だけ観たい人もいます。誰のために情報を発信するかということを今一度考えて、見せる必要があるなと感じました。美術館の過ごし方や楽しみ方を発信するのも、これからの広報やアート・コミュニケーションの仕事の一つかもしれないですね。

●MIMOCAのこれからへ向け

奥本 最後に、MIMOCAへの応援メッセージをいただけますか。

山本 若い世代が、「自分が大事だと思っている価値観をどこだったら実現できるだろう」という基準で住む場所を考えたときに、MIMOCAのような地域に開かれた、子どもの感受性が豊かに学べる場所があるということはすごく魅力的だと思うんです。私自身、MIMOCAが地方で、子どものためのアート教育や、アートを通じたコミュニケーションの大切さを発信していることにすごく勇気付けられています。

市川 MIMOCAは若いスタッフとベテランスタッフの数のバランスが良いと思います。だからきっと意見も通りやすい、風通しの良いところなんだろうなと想像しています。ぜひ若い方の力を使って、ネットワークを広げて欲しい。例えば瀬戸内界隈の広報担当者が集まって情報交換する機会をつくるとか、山本さんのような方に丸亀まで来てもらおうとか。誘いあって他館のヒアリングに出かけるのもいいですね。そうすればきっと、多様な知見を取り入れることができ、新たな目線で発信することができるのではないのでしょうか。

総 括

はじめに

2023年度は新型コロナウイルス感染症の5類移行により徐々に日常生活に規制がなくなり、美術館にも活気が戻り、アート・コミュニケーション事業も活動を増やすことができましたが、当たり前の日常が簡単に一変する状況を経験したことで、社会の変化に向き合いながら自分たちのミッションを遂行することを強く意識した一年となりました。

本稿では、本年度の『こどもMIMOCA』『プラスMIMOCA』の事業を振り返りながら、アート・コミュニケーションが“人々に愛され、親しまれる美術館”という使命に対し、どのように貢献できるのか考察します。

1. こどもMIMOCA

スクールプログラム——「よりよく生きる」を考える

近年活発に研究されている「ウェルビーイング」（幸福な状態）はその人にとって“よく在る”、つまりその人らしさを肯定し、受容できる状態を指し示す概念です。京都で開催された「ICOM京都大会2019」で提案された新定義案にもウェルビーイング（幸福）という言葉が盛り込まれていました。

博物館は営利を目的としない。博物館は開かれた公明正大な存在であり、人間の尊厳と社会正義、世界全体の平等と地球全体の幸福に寄与することを目的として、多様な共同体と手を携えて収集、保管、研究、解説、展示の活動、ならびに世界についての理解を高めるための活動を行うものである。（※1）

この定義案は採用までには至りませんでしたが、社会のさまざまな活動の中で「ウェルビーイング」が重要なキーとなっていることがわかります。社会全体が「幸福」となるには、多様性を受け入れ寛容な心を持つことが必要です。多様性とは、自己を受け入れることで他者を受け入れ、尊重することができる社会のことだと考えます。自己と他者とのつながりを築いていく上で、「ありのままの自分」を肯定する感覚がとても重要となります。一方で日本の若い世代は自己肯定感が諸外国と比較して低いという分析もあり（※2）、子どものうちに自己肯定感や非認知能力を育むことが求められています。

こどもMIMOCAの事業で多くの子どもと接する取り組みの一つが学校来館です。本年度は34団体1,573人もの児童・生徒を受け入れました。数字だけを見ると非常に多くの子どもたちを受け入れているように感じますが、2015年度には98団体もの来館があったことが記録されています。2018年からの長寿命化工事による休館とコロナ禍に見舞われ、物理的にも心理的にも学校現場との距離が生まれてしまったことは否定できません。第2次丸亀市猪熊弦一郎現代美術館運営ビジョン（令和4年4月1日策定）においても基本方針の一つに未来を担う子どもたちの感性を育むことが定められており、そのため

にもまずは子どもたちと美術館との接点を作ることが必要です。授業の一環で初めて美術館を訪れるという子どもは多く、学校来館は子どもとの接点を作る上で必要不可欠な取り組みです。

スクールプログラム（p5）で述べたように、昨年度から丸亀市の要請を受け、学校教育の場として美術館来館の促進を強化する企画が始まりました。丸亀市の子どもが学生生活の中で必ず一度は美術館に来る経験が提供できないかという内容です。

教育の現場では「10歳の壁」という言葉がよく使われています。「小4の壁」とも呼ばれ、体力面や学力面で同級生との差が出てくる時期です。他者と比較して劣等感を抱きやすくなると言われています。学習面では抽象的な概念が増えるため、読解力や言語力の差が顕著に現れるそうです。そこで、「10歳の壁」を迎える前、小学校3年生の段階で必ず美術館に来てもらうことを学校教育課へ提案しました。猪熊の言葉、在り方に触れ、美しい空間で本物を五感と体を使って感じる。同時に他者の声にも耳を傾け、新たな視点を持つ。基本的でとても大事な人間の在り方を、来館を通して経験してもらいたいと伝えました。

学校教育課からの賛同と協力を得て、本年度は教頭先生との研修会からスタートしました。スクールプログラムで自己肯定感を高め、自己と他者を受け入れる寛容性を育む——こうした非認知能力の育成は、子どもたちの普段の生活態度や学習意欲に良い変化をもたらすはずです。それを証明するためにも、学校現場と丁寧にコミュニケーションを重ね、プログラムの実践を続けていきます。

スタジオプログラム——創造せずにはいられない

造形スタジオでの活動（スタジオプログラム）も、未来を担う子どもたちの感性を育むための重要な事業の一つです。子どもは幼児期早期から視覚で捉えたものや文字を自身で描き始めるといわれています。読み書きを学ぶ前に描く行為はコミュニケーションであり、自分の思いを内外に示すものと考えます。人間の根本的な生命活動ともいえるこの行為を、本年は猪熊の仕事にも着目した「セロファンで絵をつくろう!」やスタジオ空間を活かした「みんなで壁画をつくろう」として企画・実施しました。

躊躇なく重ねて貼ったような絵の中にひっそり存在する矢印（図1）や、反復したように塗られた線（図2）が、それぞれの子どもたちの意思表示に思えて、興味深いです。美術館の魅力を独自の視点で深める「MIMOCA\ここ見て!／マップをつくろう」では、プロの編集者からの指導を受け、他者に向けてアウトプットする意識が芽生えたワークショップとなりました。客観性と言語力を刺激し、充実したMAPが制作されたと思います。さらにはキッズサポーターという制度も立ち上げました。

スタジオプログラムに限らず、私たちの事業は「子どものためのアート教育」を提唱しながらも、企画考案の過程に当事者である子どもが全く関与していませんでした。今までの活動を更新する意味でも、本年度はキッズサポーターに代表されるように、プログラム

を《提供する一受ける》という関係性から一歩進んで、より能動的に子どもが美術館に関わることができる土台作りに注力しました。

このことによって、スタジオプログラムを介した職員と子どもたちによるクリエイティブなコミュニケーションが生まれました。それは、誰もが美術を享受できる環境づくりとも言えます。これらの取り組みを徐々に美術館の文化として根付かせていくことで、さまざまな人が美術館に参画できる企画が生まれてくると期待します。

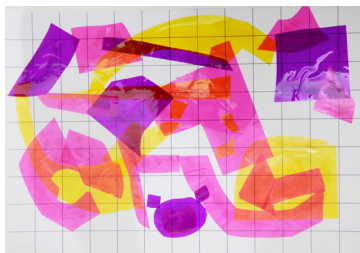


図1



図2

子どもMIMOCAの事業一つひとつは規模が小さく、単発のものも多いですが、美術館という公的な施設に対する苦手意識を取り除きます。子どもが周囲との調和を守りながら、いきいきと過ごす環境を作り出します。子どもが心から楽しく活動していると、保護者や同伴者も笑顔になります。その光景を、居合わせた来場者が微笑みながら見守る姿もよく見かけます。こうして、子どもを軸にした活動が笑顔の連鎖を生み出すようになります。猪熊は亡くなる3日前、美術館スタッフに対して美術館の役割についてこのように述べました。

人々が美術館の雰囲気に浸ることによって、生きる喜びを感じて、心が安らぎ、美しいものが分かる。そういうことから、周りの人を愛し、家庭を愛し、自分のまちを愛する心が生まれてくるんです。(※3)

子どもMIMOCAの取り組みは、ゆくゆくは地域の「ウェルビーイング」につながるものと信じています。

2. プラスMIMOCA

ラーニングプログラム ―「地域」と「ひと」に目をむける

美術館の機能・役割を伝えることもアート・コミュニケーションの大事な仕事です。現役の大学生に館内学習を提供する博物館実習も該当します。本年は作品管理から企画、

商品開発と幅広く講義と実習を行い、それらを通して「美術館の役割とは何か」と活発に実習生と意見を交えました。中でも、実習生が実際に地域を歩き、住民との会話を紹介したときの議論が印象に残っています。実習生が話を聞いた住民の一人は「丸亀市がどんどん寂しい街になっている」と話したそうです。美術館が開館されたことで観光客は増えたが、人の賑わいが定着したというわけではないと感じる人が多いようです。MIMOCAに行ったことがないという近隣住民の方もあり、「MIMOCAこそ開かれた美術館」と思って実習に来た学生にとって、予想と違う実態に驚いた様子でした。

美術館設立時に約8万人だった丸亀市の人口は、2005年(平成17年)の合併により約11万人となりました。以降はほぼ横ばいで推移し、将来の推計人口は、2040年に約9万4千人、2060年に約7万7千人と予測され、他の自治体同様に人口減少が見込まれています(※4)。多くの人が街に活力がないと述べる理由も将来的な人口減少を直観的に、あるいは実生活で感じとっているからではないでしょうか。緩やかに人口減少が起きている中、美術館が活力を与える存在になっているか、それはどのように検証できるかを考えてみたいと思います。

アート・コミュニケーション事業で地域を活気づける試みとして、「いのくまさんのスケッチブック アートはバイタミン」(2019~2021年)や「MIMOCA×tupera tupera スゴ! すぐろくプロジェクト 丸亀市通町商店街編」(2022年)など、美術館から街へと展開していくプロジェクトがあります。こういった取り組みを通して、制作過程から地域の人が関わり、作品を楽しみに訪れる市外・県外の方々との交流を生み出し、活気を生み出してきました。文化芸術の多面的な効果は短期的な事務事業評価では測りにくいといわれており、そもそも数値では表しにくいものであることは確かです。しかしながらアート・コミュニケーション事業が始まる遥か以前、それこそ30年以上にわたり地域に根ざし、文化面において地域づくりに貢献してきたことは「平成26年度地域創造大賞(総務大臣賞)」や「第44回 サントリー地域文化賞」を受賞したことで証明されています。

次に、地域住民はじめ美術館に関わる人々にとってMIMOCAが活力になるか、猪熊の美意識がどう作用するか、別の視点で検証を試みます。

美術館が開館したばかりの30年前、多感な時期を当館で過ごした子どもたちは今や40~50代となり、社会を支えています。例えば、小学生時代を当館の展示室や図書室で過ごし、美大で博物館学を学んだ丸亀市の少年。彼はやがて市の行政担当者となり、行政の立場から美術館の公益的な役割を示した上で近年減少しつつあった指定管理料を館の役割に見合った金額に戻しました。写真家で当館の理事を務める森合音氏は、当館の館長室に飾られている猪熊の「美術館は心の病院」という言葉に励まされ、「四国こどもとおとなの医療センター」のホスピタルアートディレクターに就任することを決意したそうです。当館の博物館実習を受け、現在は他館でキュレーターとして活躍している人もいます。ほんの一部ですが、これらの事例は、MIMOCAが人々の生活に密に繋がり、「未来を担う子ども達の感性を育」んできた実証に他なりません。美術館の中で感性や

創造性を育んできた人々が、社会に文化芸術の価値を広め、人々の心を豊かにしていく。この「ウェルビーイング」の循環を、MIMOCAは30年も前から実践してきたのではないだろうか。



パブリックプログラム ― 食から広がる交流と美意識

フランスの思想家・経済学者であるジャック・アタリは『食の歴史』（株式会社プレジデント社、2020）において、現在は“個食化”が進んでおり、会食という名の社交の場が消滅しつつあると指摘しています。会食とは「二人以上の人が集まり一緒に食事をする」と意味しますが、アタリはそれ以上に意義があると食の歴史を交えながら指摘します。会食は文化交流の場であり、会話を通して自己表現が生まれ、意見を交わすことでさまざまな感情を覚える重要な場であるとしています。しかしながら忙しい現代社会では、テレビやスマートフォンを眺めながら、あるいはオフィスのデスクや電車の待合室など公共のスペースで食べる姿が当たり前の光景となりました。

アート・コミュニケーションでは事業を立ち上げた2021年度から、「美味しい食と出会う交流の場」を目指してゲートプラザで年に1回マルシェを実施してきました。今年も「タコスパーティー」として食を軸にしたイベントを実施しました（PP.26-27）。猪熊夫妻のパーティースタイルを参考に、来場者をおもてなしするという趣旨です。猪熊が食卓を中心に交流を広げていた事実は、イベントを担った関係者や職員だけでなく、来場された方々にも伝わり、改めて会食の重要性を考える機会となりました。

食の風景はコミュニケーションのみならず、食器や装飾品、盛り付けなどさまざまなものの美意識へと展開します。猪熊夫妻は誰もが気軽に楽しんで食べることができる料理と空間を大切にしていたと言われており、それらは猪熊が遺した写真からも読み取れます。



年代不明 撮影：猪熊弦一郎 © 公益財団法人ミモカ美術振興財団

ランチョンマットや整然と置かれた食器、見た目に美しい盛り付けから夫妻の洗練された美への感覚、美意識が見てとれます。

本イベントは、美術館という場を介して来場者と出店者の交流を生み出し、日々の生活の中でも「食」と「美」を意識する契機となりました。来場者同士の交流、つまり見知らぬ人同士の交流にまで発展する仕組みができれば、美術館にしか成し得ない会食の場を作り、より多様で豊かな社会形成に寄与できると考えます。

孤独、不健康な食生活、食糧の高騰など、この先アタリが憂う「耐え難い未来」（※5）が容赦なく待ち受けているなか、少しでも良い方向に変えるアイデアを猪熊の在り方から得ることができます。

むすび

「地域に開かれた美術館」として、館の機能をさらに拡張していくことを期待して2021年にアート・コミュニケーション事業が設立されました。ワークショップやイベント、パブリックプログラムを積極的に展開することで、今まで美術館に来ることがなかった、あるいはハードルを感じていた方々との接点を作っていました。この事業は広義的な教育普及活動であると同時に館独自の“カラー”をつくり上げる一端を担います。このような取り組みを継続的かつ高いクオリティの活動にするためには、猪熊の作品、在り方、美術館への想いを研究し続ける必要があると強く感じました。実際に猪熊と美術館に触発され、社会で活躍している人々を輩出してきた実績を調べ、本年の事業を総括することで、猪熊の美意識と在り方が人々の活力となるのではないかなと思うようになりました。開花した花をきちんと記録し、提示していくことも、美術館の価値を高め、地域の人々の更なる励みになると考えます。

今までとこれからの成果をどのように記録し、発信していくか。広報事業も担うアート・コミュニケーションが挑戦する次なる課題が見えてきました。

本稿が、猪熊の「丸亀を日本の丸亀に作り度い」（※6）という情熱を形にしていくことに資するものであれば幸いです。

学芸課 アート・コミュニケーション担当長

奥本 末世

〔註釈〕

- ※1 引用：東京大学大学院准教授 松田 陽 “ICOM博物館定義の再考”、ICOM JAPAN、2020年3月 <https://icomjapan.org/journal/2020/09/03/p-1315/>（2024年1月24日 閲覧）
- ※2 参考文献：平成25年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査報告書（内閣府） p.6
- ※3 長原孝弘「猪熊先生の最後の五日間」『MIMOCA開館30周年 どこにもない美術館を目指して』丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2021年11月20日、p.36
- ※4 第二次丸亀市産業振興計画、平成30年4月発行、p.4
- ※5 ジャック・アタリ「第九章 監視された沈黙のなかでの個食」「食の歴史」株式会社プレジデント社、2020年3月、p.308
- ※6 河野虎雄「追慕」『キャンパスを超えた画家猪熊弦一郎』四国新聞社、1994年5月、p.108

プログラム名	講師	対象	開催日時	参加者／入場者	協力
「左官職人になろう!」作品展示			2023/4/21-23 各日10:00-18:00	入場者425名	
「左官職人になろう!」作品展示関連イベント 左官の技にチャレンジ!		どなたでも	2023/4/22、23 各日13:00-16:00	参加者79名 [4/22 36名・4/23 43名]	四国化成ホールディングス株式会社
ものづくりワークショップ セロファンで絵をつくろう!	MIMOCA職員	小学生～高校生	2023/5/4、5 各日10:30-12:00／14:00-15:30	参加者93名 [5/4 42名・5/5 51名]	
「セロファンで絵をつくろう!」作品展示			2023/5/12-28 各日10:00-18:00 ただし、5/12 12:00-15:00、5/24 10:00-13:00は都合により一時閉場	入場者450名	
MIMOCA＼ここ見て!／マップをつくろう	須鼻美緒	小学生～高校生	2023/6/24 10:30-12:00、 7/2 10:30-15:00、7/17 10:30-15:00	参加者14名	
選んでミックス☆MIMOCA缶バッジ! キッズサポーター募集!	MIMOCA職員	「セロファンで絵をつくろう!」 応募者136名	2023/07/25 10:30-12:00	参加者4名	
選んでミックス☆MIMOCA缶バッジ!	MIMOCA職員	子どもから大人まで	2023/8/9、10、12、13 各日10:00-12:00／14:00-16:00	参加者639名 [8/9 138名・8/10 139名・ 8/12 199名・8/13 163名]	
MIMOCA＼ここ見て!／マップをつくろう MIMOCAを探検! こどもガイドツアー		どなたでも	2023/9/17 11:30-16:00 ・ミモカ調さたい 11:30-12:30頃 ・ミモカうさぎとかめチーム 13:30-14:30頃 ・MIMOCA研究所 15:00-16:00頃	参加者24名 [11:30- 9名・13:30- 5名・15:00- 10名]	
MIMOCA＼ここ見て!／マップをつくろう マップのプロセスルームオープン			2023/9/16、17 各日10:00-18:00	入場者291名	
みんなで壁画をつくろう		どなたでも	2023/10/13-15 各日10:30-16:00	参加者509名 [10/13 56名・10/14 219名・ 10/15 234名]	
「みんなで壁画をつくろう」作品展示			2023/11/3-5 各日10:00-18:00	入場者265名	
ワークショップ&オープンスタジオ すうじであそぼう!	すうじのつぶやき	小学生以上	ワークショップ「ベタベタおめん」 2023/11/23 10:30-12:00	参加者24名	
		子ども～大人まで	オープンスタジオ「どんどんジャングル」 2023/11/23 13:30-15:00、11/25、26、 12/2、3、9、10 各日10:30-15:00	参加者526名 [11/23 152名・11/25 36名・ 11/26 61名・12/2 53名・ 12/3 85名・12/9 85名・12/10 54名]	
学校来館		高校生以下	2023/4/1-2024/3/31	34団体 1,573名	

※ワークショップの主催は、すべて丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、公益財団法人ミモカ美術振興財団、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁

プログラム名	講師	開催日時	対象	参加者／入場者	主催／共催
博物館実習	MIMOCA職員	2023/8/29-9/2	博物館学芸員資格取得を目指す方	5名	
企画展「須藤玲子:NUNOの布づくり」関連プログラム 須藤玲子 つぎつぎ布ワークショップ	須藤玲子	2023/10/21、22 各日11:00-15:00	どなたでも	参加者 53名 [10/21 26名・10/22 27名]	[主催] 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、 公益財団法人ミモカ美術振興財団、 独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁
企画展「回復する」関連ワークショップ つないでつくる つなぎんぐ	小金沢健人	2023/11/12 13:30-16:30	小学5年生～大人	参加者 11名	[主催] 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、 公益財団法人ミモカ美術振興財団 [助成] 一般財団法人自治総合センター
開館32周年記念イベント MIMOCA'S BIRTHDAY タコスパーティー		2023/11/23 10:00-14:00	どなたでも	入場者約950名	[主催] 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、 公益財団法人ミモカ美術振興財団、 独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁
企画展「回復する」関連ワークショップ 日光で描くフォトグラム～青写真をつくろう!	兼子裕代	2024/2/12 10:00-16:00	小学生～大人	参加者19名	[主催] 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、 公益財団法人ミモカ美術振興財団 [助成] 一般財団法人自治総合センター

ゆっくりして、リラックスして、
自分の悩みもなんも、
ここで流してくれればいいんですよ^{*}

猪熊弦一郎

編集：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 学芸課 アート・コミュニケーション

執筆：奥本末世、大浦美咲、島田里都子、佐伯美帆、宮本準子

デザイン：株式会社アルファ

撮影：大峯達磨 (pp.16-17、pp.22-23、pp.26-27)、高橋マナミ (pp.24-25、pp.28-29)

フライヤーデザイン：高橋マサエ (radial) (p.8、p.10、p.12、p.14、p.16)、

野村勝久 (野村デザイン制作室) (p.24)、三宅瑠人 (p.26)

発行：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館／公益財団法人ミモカ美術振興財団

〒763-0022 香川県丸亀市浜町80-1

Tel.0877-24-7755

Fax.0877-24-7766

Mail mimoca_info@mimoca.jp

www.mimoca.org

^{*} 1991年11月22日、MIMOCA落成式後のインタビューで語った言葉より